

構文の適用可能性
——日独語の好まれる事態把握との関連において——

大藪正彦

1. はじめに

Goldberg (1995) 以来、構文研究が顕著な広がりを見せているが、特定の文構造を特定の意味と結びつけて考えるというアプローチは、例えば Zaima (1987), Ickler (1990) など、それ以前から見られるものである。「構文基盤的」なこれらのアプローチに共通しているのは、従来の「語彙基盤的」なアプローチでは説明の難しいある種の事例を、「構文」と動詞の「適合」(ないし「調和」, 「矯正」) という観点から説明しようとする点である。しかしながら一方で、各構文がすべての動詞と「適合」できるわけではない。ドイツ語の構文の使用実態は、言うまでもなくドイツ語の分析によってのみ明らかにすることができる。また、言語間において、構文の分布上の差異があることは——「構文」という単位がどれ程意識されていたかは別として——以前から様々な形で認識されているところである。例えば Chamberlain (1905) には次のような記述がある。

Thus, this language [= Japanese] rejects such expressions as “the *heat* makes me feel languid,” “*despair* drove him to commit suicide,” [...] etc., etc. One must say, “being hot, I feel languid,” “having lost hope, he killed himself,” [...] and so on [...] (Chamberlain 1905/1981: 276)

言語間における構文適用の異同、つまり、特定の構文がどのような状況の表現にまで適用され得るのかという点も、個別言語の具体的分析によってのみ明らかにすることができる性質の問題である。本稿では、次に挙げるようなドイツ語の結果構文と *bekommen* 受動を出発点とし、日本語の類似する構文と対照しながら、1. 言語によって構文の適用可能性が異なること、2. しかしながらその相違は言語全体の体系の中で十分に動機づけられていると見なすことができる、という二点について論じる¹。

- (1) a. Anna hat den Boden **kaputt getanzt**.
b. *花子は床をボロボロに踊った。
- (2) a. *Hans hat (von Anna) den Apfel **gegessen bekommen**.
b. 太郎は (花子に) リンゴを食べてもらった。
c. 太郎は (花子に) リンゴを食べられた。

筆者は以前にも両構文を対比的に扱ったことがあるが (Ozono 2003)、本稿ではそこで十分に捉えることができていなかった部分について、現在の立場から検討を加えてみるという意味合いもある。両構文は一見関連がなさそうに見えるが、いずれも基本的に「人」を主語とする構文であり、「人」と「事態」が言語レベルでどのように関連づけられるのかとい

¹ 本稿は「京都ドイツ語学研究会第86回例会」(2015年5月16日、キャンパスプラザ京都)において行った口頭発表に基づいている。また、本研究は科学研究費助成事業の助成を受けている(課題番号25370478, 25284081, 15H03199)。

う点において興味深い視点を提供する。以下、次の第 2 節では結果構文を、第 3 節では *bekommen* 受動文を、日独対照の観点も交えながらまずは個別に概観する。その後、第 4 節で構文適用の動機づけについて考察する。なお、本稿で言う「構文」(Konstruktion)とは、Goldberg (1995) に代表されるように、形式と意味から成る単位であるという想定に立つものである。一般には必ずしも文という単位に限定されるわけではないが、本稿で扱うのは文のレベルである。

2. 結果構文

結果構文 (Resultativkonstruktion) として本稿が対象とするのは、次に示すように、結果状態を表す形容詞・前置詞句を伴う他動詞構文である²。

(3) Sie rüttelt ihn wach.

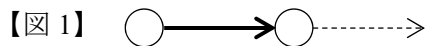
NP₁ + V + NP₂ + AP/PP

〈結果状態〉

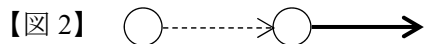
2.1 結果構文の意味

まずドイツ語の結果構文の意味について簡単に見ておく (詳細は大藪 2000 を参照)。次の三つの例から出発する。

(4) Sie hat ihn [an der Schulter] gerüttelt.



(5) Sie hat ihn [auf]geweckt/wach gemacht.



(6) Sie hat ihn wach gerüttelt. 〈結果構文〉



まず (4) では、「彼女」が「彼」にどのように働きかけたのかということは表されているが、それによりどのような変化が生じたのかという結果については特に表されていない。一方 (5) では、「彼女」が「彼」に働きかけて特定の状態変化を引き起こしたことは表されているが、どのように働きかけたのか、例えば、呼びかけたのか、揺すったのか、叩いたのか、については語彙的には指定されていない。以上の両タイプに欠けている部分を補うように存在しているのが、(6) のようなドイツ語の結果構文である。ここでは働きかけの様態と状

² Welke (2009) は形容詞を取るタイプの構文と前置詞句を取るタイプの構文を分けて論じているが、両者は連続的であると考えられる (大藪 2000)。本稿ではまとめて論じる。

態変化の両方が表されている（ただしそれぞれがどの程度詳しく表されるかについては個々の事例ごとにバリエーションがあり得る。この点については以下に述べる）。図 1~3 はこれを簡単に図式化したものである。丸は事態の参加者を示しており、左側の丸が行為の出発点である行為者を、右側の丸がその行為の向けられる対象を示している。矢印については、左側が働きかけを、右側が状態変化を示すが、実線は語彙的に詳しく指定されていることを、破線は詳しく指定されていないことを示している。

結果構文の意味は大きく二つのタイプに分けて考えることができる。一つは動詞部分が比較的純粋に行為動詞であるもの、もう一つは動詞自体がある程度結果を含意するものである。順を追って見ていく。

(i) 比較的純粋に行為動詞であるもの

(7) Sie hat sich **müde gelaufen**.

(8) Sie hat sich die Füße **wund gelaufen**.

ここでは動詞の意味から結果述語の意味内容を予測することは不可能である。結果述語は動詞の意味から独立している。このタイプの結果構文を Washio (1997) は「強い」結果構文 (strong resultative) と呼んでいる。

(ii) 行為による結果を含意するもの

(9) Sie hat den Tisch **sauber gewischt**. (彼女はテーブルをきれいに拭いた。)

(10) Sie hat die Schuhe **blank geputzt**. (彼女は靴をぴかぴかに磨いた。)

結果述語が動詞の意味から完全には独立していない。次節の議論を先取りすると、この段階から日本語でも結果構文が可能になる。Washio (1997) の言う「弱い」結果構文 (weak resultative) である。上例の場合、動詞は目的語の状態変化を必ずしも含意しないが、「変化の方向性」までは含意しており、仮に状態変化が起こるなら、ある特定の方向に変化するという含みがある。それに対し、次の例では動詞が特定の状態変化を明確に含意している。

(11) Sie hat ihr Haar **blond gefärbt**. (彼女は髪をブロンドに染めた。)

(12) Sie hat die Vase **in Stücke gebrochen**. (彼女は花瓶を粉々に割った。)

動詞自体が使役動詞寄りであり、結果述語は動詞がすでに含意している結果状態をさらに特定化している。この段階になると結果述語に前置詞句が多くなることも特徴的である (Kaufmann 1995, Kaufmann/Wunderlich 1998)。結果状態を一義的に指定するような使役動詞になると、結果状態の表示は明らかに困難になる（以下、引用文中の強調はすべて本稿の筆者による）。

(13) *Karl **zerschlägt** die Vase **kaputt**. (Eisenberg 2013: 324)

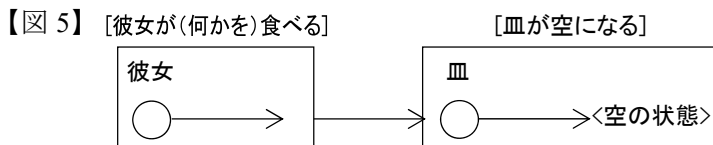
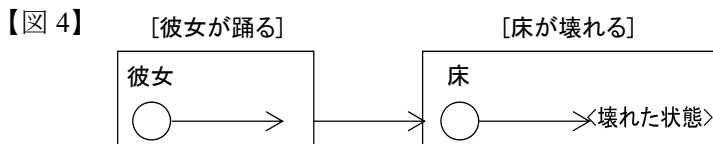
(14) *Er **ermordete** die Frau **tot**. (Rapp 1997: 108)

2.2 結果構文の日独対照

ここで比較の対象とする日本語の構文は、ドイツ語と平行する形で、「NP₁ + NP₂ + AP + V」(AP は形容動詞なども含む) という形式を持つもの限定する³。結果構文の対照研究は、影山 (1996), 鷲尾 (1997) らの研究により注目されるようになり、とりわけ日英語において詳細に議論された。その後も各種の議論があるが、大まかに言って精緻化の方向への議論であると言ってよいであろう (例えば, 轟 2004, 草山/一戸 2005 など)。

まず前節の (i) のタイプ, Washio (1997) の言う「強い」結果構文は日本語では不可能である。

- (15) a. Sie hat den Boden **kaputt getanzt**.
 b. *彼女は床をボロボロに踊った。
- (16) a. Sie hat den Teller **leer gegessen**.
 b. *彼女は皿を空に食べた。



ここで表現されている内容を図式化したものが図 4, 5 である。(15) で言えば, 表されている状況は「彼女が踊った」ということ, そしてそれによって「床が壊れた」(誇張の場合も含む) ということである。上述の通り, 動詞から結果述語の表す内容を予測することができないのが特徴であり, 状態変化については独立性の高い個別の事態であると見なすことができる。それにもかかわらず, 全体として各事態が関連づけて捉えられているわけである。図では全体を構成する個別の事態を四角の囲みで示している。

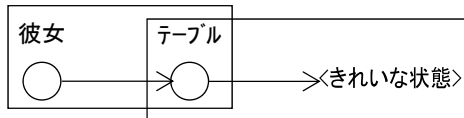
前節の (ii) のタイプ, Washio (1997) の言う「弱い」結果構文では日独両方の表現が可能となる。

- (17) a. Sie hat den Tisch **sauber gewischt**.
 b. 彼女はテーブルをきれいに拭いた。

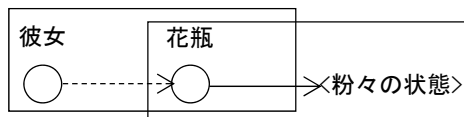
³ 日本語では複合動詞を用いることによってこのタイプの結果構文と同等の内容を表すことが可能な場合がある(「揺すり起こす」など)。ただし複合動詞はここでは比較対象とはしない。影山 (1994) の分析では、「揺すり起こす」のような複合動詞は項構造のレベルで形成されるのに対し, 結果構文は語彙概念構造 (CLS) レベルで形成されるとされている。簡単に言えば, 複合動詞は二つの動詞の単純な合成(「彼を揺する」+「彼を起こす」)であるのに対し, 結果構文では, 動詞の空の項に新たな項が代入される(「目覚めた状態になる」が付加される)ということであり, 性質の異なる現象が問題になっているということである。

- (18) a. Sie hat die Vase **in Stücke gebrochen**.
 b. 彼女は花瓶を粉々に割った。

【図 6】 [彼女がテーブルを拭く] [テーブルがきれいになる]



【図 7】 [彼女が花瓶を割る] [花瓶が粉々になる]



上述の通り，結果述語の表す内容が動詞の意味から完全には独立していない。(17) で言えば，「拭く」はある一定方向での状態変化を含意しており，「きれいに」という結果述語はその状態変化を特定化している。「テーブルを拭く」という行為と「テーブルがきれいになる」という状態変化は，お互いに完全に独立したものとはなっていない⁴。上の図 6 はこの状況を図式化したものである。(18) では動詞がさらに使役動詞寄りになっている。どのように割ったのかという働きかけの様態に関しては語彙的に指定されていないが(図 7 ではこれを破線の矢印で示している)，結果状態に関しては(17) の場合よりも明確に指定されている(左側の四角の囲みの範囲の違いでそれを示している)。

3. bekommen 受動

ここで言う bekommen 受動 (*bekommen*-Passiv) とは，次のように「(助動詞的に用いられた) *bekommen/kriegen/erhalten* + 動詞の過去分詞」という形式を持ち，能動文における与格を主格にする受動構文であると考え(この構文のステータスについての議論は大藪 2008 を参照)。

- (19) Er **bekommt** eine Krawatte **geschenkt**.
bekommen/kriegen/erhalten + Partizip II
 <助動詞>

3.1 bekommen 受動の意味

頻度，定着度に照らし，*bekommen* 受動文は「ある対象物が主語の所有に至る」という受容の状況を中心的に表すと言える(大藪 2002)。次のような場合である。

⁴ 動詞 *wischen* は状態受動が可能であり，*Der Tisch ist gewischt* と言えば，ふつうテーブルがきれいになっていることを意味する。ただし，*Ich habe den Tisch gewischt, aber er ist nicht sauber* という表現も十分に可能であり，動詞が明確に結果の意味を含むとは言い切れない。これに対し *brechen* では，より明確に結果の達成が含意される。少なくともドイツ語において，**Ich habe die Vase gebrochen, aber sie ist nicht kaputt* と言えば明らかに論理矛盾である(動詞意味の結果性についての議論は池上 1980-81 を参照)。

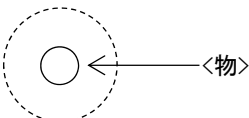
(20) Er **bekommt** eine Krawatte **geschenkt**. (= 19)

【図 8】 

図 8 は (20) で表されている状況を示したものである。左の丸は受容者（主格主語）を表している。この場合の受容者はあくまで受動的な存在であり、意図的に働きかけて得るといふ読みはドイツ語にはない（例えば命令文にすることができない）。

次の段階として、対象物の到達点が主語の近辺に拡張される場合がある。次の例では到達点は主語の「身体部位」である。

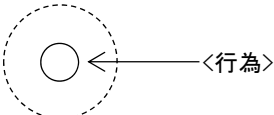
(21) Er **bekommt** einen Kranz um den Hals **gehängt**.

【図 9】 

到達点は、ほかに「衣服」、「所有物」など主語にとって身近なもの、つまり何かしら「関連性」のあるものに限られる。主語にとって関連性のあるこの領域（関連領域）を図 9 では破線の丸い囲みで示した。

そして最終的に、主語が何も具体的な対象物を受け取らない状況にまで拡張される場合がある。ここで表されている状況は「主語がある行為を得る、経験する」というものであるが、行為の向けられる対象はやはり主語にとって「関連性」のあるものである（次の例ではふつう「彼が身に着けているネクタイ」と解釈される）。

(22) Er **bekommt** die Krawatte **abgeschnitten**.

【図 10】 

本稿では詳しく論じる余裕がないが、拡張的な *bekommen* 受動（図 10 のタイプ）の成立条件を考える上でポイントとなるのは、動詞の「他動性」、影響を受ける対象と主語の間の「関連性」、主語の「有情性」である。つまり、「関連性のある対象に強い影響が及んだことを主語が感じ取る」という条件を満たしていることが重要となる（次の 3.2 節の議論も参照；詳細は Ozono 2005）。なお、容認度が微妙な例においては、最終的に主観的な影響が読み込まれるかどうかは鍵となる場合がある。

(23) a. ?Er **bekam** ins Gesicht **gestarrt**. (Wegener 1985: 208)

b. Ich kann es nicht einmal leiden, wenn eine Frau sich auf mein Bett setzt. Man bekommt dann von oben herunter ins Gesicht gestarrt. (Leirbukt 1997: 98)

3.2 bekommen 受動の日独対照

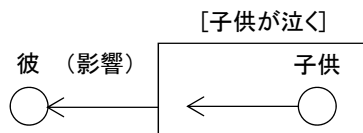
比較の対象としたい日本語の構文は「モラウ」を補助動詞として用いるテモラウ構文⁵と「(ラ)レル」による間接受動文⁶である。前者については、bekommen とモラウが翻訳上の等価語であり、両者ともに(補)助動詞的に用いられている点で共通している。構文の表す状況も bekommen 受動(上の図 8~10 の状況)との平行性が確認できる(例えば高見/久野 2002: 283ff.)。ただし、テモラウ構文は原則として「利益的」な読みとなる。これに対応する「被害的」な読みの構文が間接受動文である(なお、ドイツ語の bekommen 受動は、能動文と同様、文脈に応じて利益的な読みにも被害的な読みにもなり得る)。また、先にドイツ語の bekommen 受動においては主観的な影響が読み込まれるかどうかは容認度に影響することがあることに触れたが、日本語では当該の構文が用いられさえすれば、多くの場合、特に問題なく影響が読み込まれるという点に注意しておいてよいだろう。

- (24) a. 彼は(彼女に)リンゴを食べてもらった。〈テモラウ構文〉
b. 彼は(彼女に)リンゴを食べられた。〈間接受動文〉
c. *Er hat (von ihr) den Apfel **gegessen bekommen**.

この例に見るように、bekommen 受動の拡張的な用法は極めて制約が強い。次のように日本語の間接受動文が単純な自動詞からも形成できるのとは大きく異なる。

- (25) a. 彼は子供に泣かれた。
b. *Er hat vom Kind **geweint bekommen**.

【図 11】



(25a) で表現されている内容は、まず「子供が泣いた」ということ、そしてそれによって「彼」が(被害的)影響を受けたということである。独立性の高い事態が「彼」との関連において捉えられている。図 11 はこれを図式化したものである(これまで同様、丸は事態の参加者を、四角の囲みは独立性のある個別の事態を表している)。

次は日独両方の表現が可能であるような場合である(ただしドイツ語の方は一般によく使われる表現であるとは言えない)。

⁵ テモラウ構文は受け身文とは言えないものの、テアゲル(テヤル)構文と転換可能な関係にあり、その際テモラウ構文の方が制約が強い(高見/久野 2002)。これは bekommen 受動の方が能動文よりも制約が強いことと平行している。

⁶ 周知の通り、間接受動と直接受動の境界は議論のあるところであるが(例えば柴谷 2000)、本稿では単純に、受け身文における(明示的・暗示的)ガ格名詞句が能動文のヲ格名詞句に対応しない場合であると考える。また、機能的に見ると、間接受動の比較候補としては与格構文(能動文)の方が適切であるという考えもあるだろう(例えば Ogawa 2003)。ただし本稿では、間接受動文のガ格名詞句と bekommen 受動文の主格名詞句が対応関係にある点、並びにテモラウ構文との対称性を踏まえ、bekommen 受動を比較対象とする。

- (26) a. 彼は（彼女に）腕を折られた。
 b. Er hat (von ihr) den Arm **gebrochen bekommen**.

【図 12】

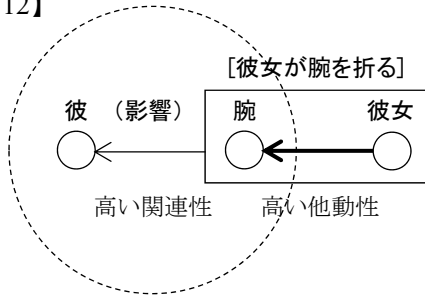
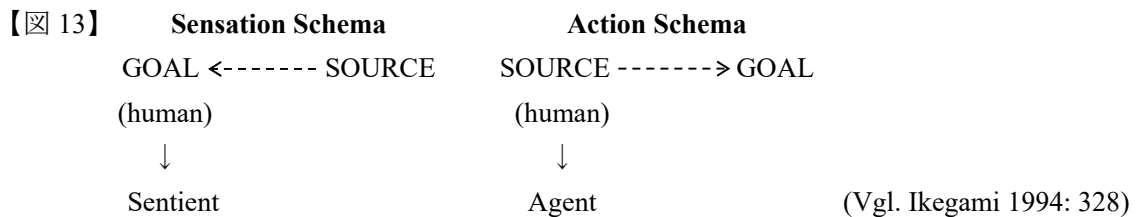


図 12 は先の図 10 を厳密化したものである。ここでドイツ語の表現が可能であるのは、「折られた」のが取りも直さず「彼の腕」だからである。つまり、両者の間には高い関連性が存在している。加えて、対象に及ぶ影響が強いものであるという点も重要である（図 12 では右側の太い実線による矢印でこれを示している）。これは先の図 11 の状況とは異なる。つまり「彼」から独立した事態が問題になっているかどうかは相当にあいまいである。上の図から見て取れる通り、「彼女が腕を折る」という事態は、それが「彼の腕」である限り、彼と無関係ではあり得ない。

4. 構文適用の動機づけについて

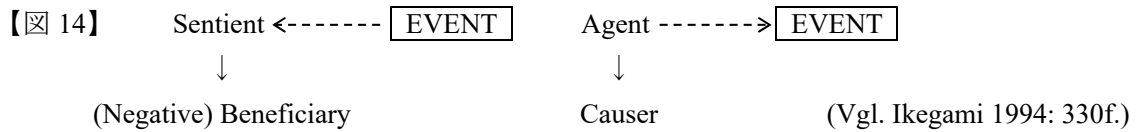
以上、ドイツ語の結果構文と *bekommen* 受動文を取り上げ、それぞれの構文がどのような状況の表現にまで拡張され得るのかということを見てきた。日本語の状況と照らし合わせると、興味深い対比を成していることが分かる。ドイツ語において、結果構文は相対的に適用範囲が広く、*bekommen* 受動は（テモラウ構文・間接受動に比して）相対的に適用範囲が狭い。

なぜこのような差異が生じているのであろうか。この問いに対し、筆者は以前、各言語の話者が言語化の際に好んで用いるスキーマということで説明しようとした（Ozono 2003）。取り上げたのは、Ikegami (1994) で扱われている「感覚のスキーマ」(sensation schema) と「行為のスキーマ」(action schema) である。図 13 に見るように、事態に関与する人間が、前者では「感受者」(sentient) —— 受動的に外からの刺激を感じ取って内在化する存在——として、後者では「動作主」(agent) —— 能動的に他者に働きかけ、影響し、変化させる存在——として捉えられる。



本稿で取り上げた構文では、上のスキーマがさらに拡張された形で適用されている。つま

り、スキーマを構成する項が、具体的・物理的な「物」から、一段階抽象度の高い「事態」(event) となっている。次のような図式である。



しかしながら、考えてみれば気づく通り、好まれるスキーマという説明は、結局のところ一連の現象を抽象化して捉えているに過ぎず、一般化のレベルにとどまったままである。つまり、説明のレベルには達してはいなかったと言える。

では、そこから一步進めて、これらのスキーマの適用を促すようなある種の動機づけが想定できるであろうか。この点について、現在では、言語化に先行する事態把握のレベルにおいて、各言語の話者によって好んで取られるスタンスの違いに還元できるという想定に立っている。次節ではこの点について取り上げる。

4.1 二つの事態把握

すでに様々な形で指摘されている通り、日本語では、英語やドイツ語などのヨーロッパ言語と比べ、事態を「自己中心的」な視座から捉え、「見え」のままに言語化する傾向が強いと言える。その場合、話し手（主体）は、言語化の対象となる事態（客体）にいわば埋め込まれた格好となり、両者の境界はあいまいになる。そのようなスタンスでは自己は言語化の対象となりにくい。一方、ドイツ語などの言語では、話し手（主体）は事態（客体）に対し距離を取った形で事態把握を行う傾向が強い。その場合、主体と客体の境界は明確である。そのようなスタンスでは、自己を含む状況であっても、自己が客体化された形で言語化されるということが起こる。ここではこれら二つの事態把握のタイプを、次のように「主客合一的な事態把握」と「主客対立的な事態把握」としてまとめておく（Ikegami 2015, Ozono 2008 など；中村 2004 による I モード, D モードも参照）。

主客合一的な事態把握（主観的事態把握）

話し手は問題の事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話し手は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態把握をする（＝自己投入）。

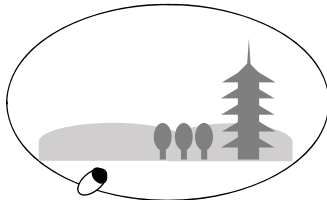
主客対立的な事態把握（客観的事態把握）

話し手は問題の事態の外にあって、傍観者ないし観察者として客観的に事態把握をする。実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話し手は（自分の分身をその事態の中に残したまま）自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に（自己の分身を含む）事態を把握する（＝自己分裂）。

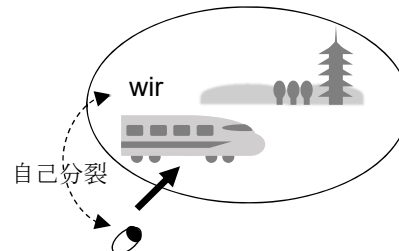
具体例で確認しておく。

- (27) a. 今は武蔵の国になりぬ。(更級日記)
 b. Jetzt waren wir in Musashi. (U. Kemper 訳)
- (28) a. まもなく京都です。(列車内のアナウンス)
 b. In Kürze erreichen wir Kyoto Hbf.

【図 15】



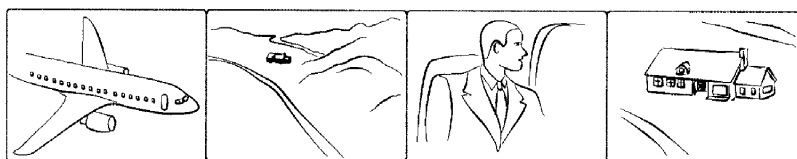
【図 16】



(27), (28) とともに、日本語では「自己中心的」な視座が取られている——自己は見えない——のに対し、ドイツ語では「自己分裂」の構図——自己を把握している自己がいるという構図——になっている。なお, (28a), (28b) の状況をそれぞれ簡単に図式化したものが図 15, 16 である。

図 16 に見るように、「主客対立的」な事態把握を特徴づける現象として「自己分裂」の過程が認められるわけであるが、これに対し、「主客合一的」な事態把握を特徴づける現象として「自己投入」を指摘することができる。これはまず、話し手が事態の中に自らを臨場させるということであるが、さらに一步進めて聞き手を含めた状況を考えるならば、「自己投入」の状況というのは、話し手・聞き手がともに事態の中に臨場し、視線を重ね合わせるということであると言える (Ozono 2013)。映画の撮影技術に「主観カメラ」(subjektive Kamera) と呼ばれるものがあるが、これで考えてみると分かりやすいだろう。これは登場人物の視点からシーンを描くもので、下の図 17 で言うと、登場人物が挿入された次のカット (左から 4 コマ目) が該当する⁷。

【図 17】主観カメラ (Müller 2010: 102)



「主観カメラ」では、視聴者は登場人物が見ている状況としてカットを理解する。すなわち両者が「同型的」なスタンスを取るわけである。ただし、当該のカットだけを見ていても「主観カメラ」かどうかは判断できない点に注意する必要がある。言語の場合に引きつけて言えば、ある表現を「主客合一的 (主観的)」に理解すべきか、「主客対立的 (客観的)」に理解すべきかは、言語表現自体そのものからは判断できない場合もあり、文脈や状況、さら

⁷ 三瓶 (2012) はドイツ語の体験話法の説明にこの「主観カメラ」を用いている。

には聞き手（読み手）の主体的な解釈に左右される場合もあるということである。加えてもう一点指摘しておく、「主観カメラ」が導入されると、視聴者は登場人物の考えや気持ちを理解しやすくなる（Müller 2010: 111f.）。すなわち、視線を重ね合わせる——心理学の術語を使うならば「共同注意」（joint attention）が成立する——と共感が生じやすくなるということである。これは日本語の言語現象を考える際に特に考慮すべき点である（大藪 2012）。

4.2 「主客対立的」な事態把握と構文

まず結果構文から取り上げる。

- (29) a. Sie hat den Boden **kaputt getanzt**. (= 15a)
 b. *彼女は床をボロボロに踊った。 (= 15b)
 c. 彼女は踊って床をボロボロにした。

【図 18】

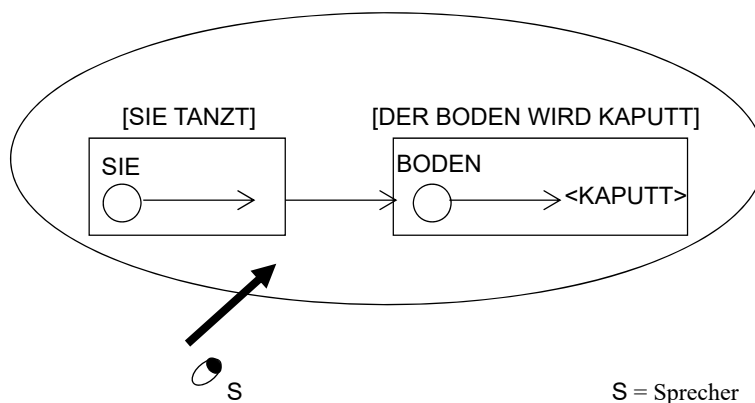


図 18 に示したように、ドイツ語の結果構文では、時間とともに展開していく連続した個々の事態（成分事態）を重ね合わせ、全体として一つのまとまりを成す事態（複合事態）として表現している。ドイツ語の表現における話し手の視座は、相対的に対象から遠く、俯瞰的である。これはドイツ語における事態把握の傾向と合致する状況になっている。

ところで、(29a) に対応する適格な日本語が「彼女は踊って床をボロボロにした」 (= 29c) であるとするならば、日本語では事態の進行とその変化が順を追って描写されていることになる。認知言語学で、「順次的スキャニング」（sequential scanning）と「総括的スキャニング」（summary scanning）という二つの認知処理のタイプが区分されることがあるが、(29c) の表現では前者の認知処理が行われているということになる。「順次的」に認知処理を行っていくというのは、事態を「体験的」に把握しているということにほかならない。一方でドイツ語の方は「総括的」な認知処理が行われていることになる。

この関連で、本多 (2009) による次の指摘は興味深い。日英語の結果構文についての一般化である。

日本語の結果構文は、他者の行為に関わる因果関係を、その人の内面に立ち入ったかたちで一人称的に捉えて述べる構文であると言える。それに対して英語の結果構文は、他者の行為にまつわる因果関係をその人の内面には立ち入らず、外から三人称的に捉え

て述べる構文である [...]。(本多 2009: 404)

日本語の結果構文と、日本語の事態把握のスタンスに特徴的な「自己投入」というプロセスとの関連性が見て取れよう。また、草山／一戸 (2005) は、同様に日英語の結果構文に関する制約について、次のようにまとめている。

日本語の行為動詞派生の結果構文が成立するためには、行為事象と結果事象の間に、「目的関係」があると一般に認識されなければならない。[...] 英語の行為動詞派生の結果構文が成立するためには、行為動詞と結果事象との間に、純粋な「因果関係」があると一般に認識されなければならない。(草山／一戸 2005: 179)

日本語に見られる制約について「目的」という概念を用いて一般化しているが、ある行為の「目的」を理解するには、行為者の内面にまで立ち入った形で言語化される必要があると考えるならば、ここでもやはり日本語の「自己投入」というプロセスとの関連性が確認できることになる。

4.3 「主客合一的」な事態把握と構文

続いてドイツ語の *bekommen* 受動を、日本語との対比で考えてみよう。

- (30) a. 彼は子供に泣かれた。(= 25a)
b. *Er hat vom Kind geweint bekommen. (= 25b)

【図 19】

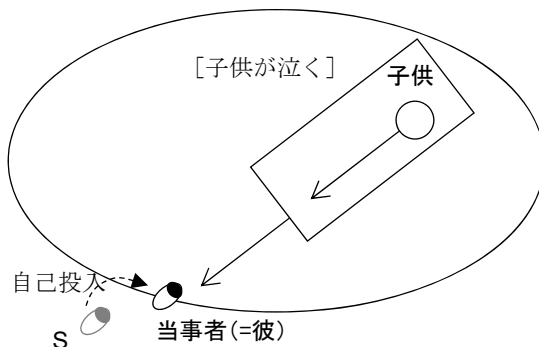


図 19 に示したように、日本語のテモラウ構文や間接受動文では、当事者の視座から事態が描かれる (久野 1978)。ドイツ語の *bekommen* 受動の拡張には影響の読み込みが鍵となる——そしてそのことが相対的に難しい——ことに触れたが、これは久野 (1978) の表現を借りるならば「共感」の問題ということになる。ドイツ語では俯瞰的な「主客対立的 (客観的)」事態把握が相対的に優勢であり、「主客合一的 (主観的)」事態把握が稀であることを踏まえるならば、*bekommen* 受動の比較的限られた使用は、ドイツ語全体の体系の中で十分に動機づけられていると見なすことが可能である。

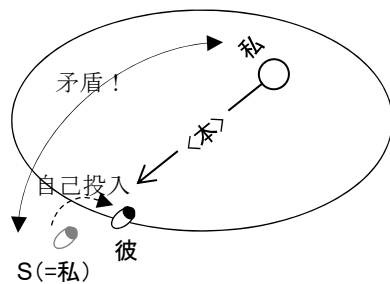
この関連で次の点も取り上げておいてよいだろう。日本語と対比する形で、*bekommen* 受動の使用は一般に制限が強いと述べてきたが、逆に次のような場合もある。日本語では視点

制約（久野 1978）のかかるケースである。

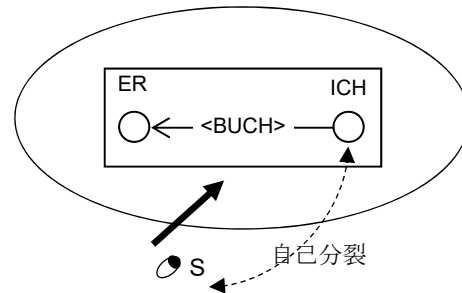
- (31) a. *彼は私に本を貸してもらった。
 b. Er hat von mir ein Buch geliehen bekommen.

この場合、ドイツ語の表現は問題なく可能である。ではなぜドイツ語には制約がかからないのかと考えるならば、ドイツ語では、話し手が「自己分裂」という認知過程を経て第三者のように言語化されることがごくふつうに行われるという、より一般的なドイツ語の傾向の枠組みの中で捉えることが可能である。次の図 20, 21 は両言語の事態把握のスタンスを図式化したものである。日本語の (31a) では、「彼」に「自己投入」した話し手の「自己中心的」な視座から事態が把握されており、そもそも「自己分裂」を伴う「主客対立的」な構図とは相容れない。一方ドイツ語の (31b) は、「彼」も、(自己分裂を経て) 客体化された「私」も、ともに距離を置いて俯瞰的に言語化されており、特に矛盾を生じるような点はないというわけである。

【図 20】



【図 21】



最後に、「主客合一的」なスタンスは、上述の通り「同型的」なスタンスとも関連し、従って「共感」が生じやすい状況となるため、当事者と事態の関係について話し手の評価が入り込みやすいと考えてよいならば、日本語で「利益」と「被害」を構文上区分し、ドイツ語で区別しないのも、おそらく事態把握の傾向と無関係ではないことになろう。

5. 関連現象——結びに代えて

以上、日独語の構文の適用可能性に関する相違の背後に、一貫した傾向性が見て取れることを確認してきた。それらはいずれも両言語の事態把握の傾向に還元できるものである。以上の傾向は決して一部の事例にのみ該当するのではなく、他の構文、さらには言語内の異なった領域にも見出すことができるものである。残った紙幅を使っていくつかの事例を紹介しておきたい。

まずドイツ語の動詞は、いわゆる被動目的語 (affiziertes Objekt) と並んで、結果目的語 (effiziertes Objekt) を相対的に広く取ることができる。「行為+結果」という複合的な事態が、「俯瞰的・総括的」に捉えられているという点において、結果構文との平行性が認められる。

- (32) a. Sie hat im Garten ein Loch gegraben.
 b. Sie hat sich (mit der Zigarette) ein Loch in den Mantel gebrannt.
- (33) a. 彼女は庭に穴を掘った。
 b. *彼女は(煙草の火で) コートに穴を焦がした。

次に、ドイツ語では行為動詞が到達点とともに用いられることがあるというのも同様である。「行為+(結果としての)移動」という事態が「俯瞰的・総括的」に捉えられている。

- (34) a. Sie ist in den Saal getanzt.
 b. *彼女はホールの中へ踊った。

日本語の「順次的・体験的」な表現とドイツ語の「総括的・俯瞰的」な表現という対比は、これ以外にも様々な形で広く見出すことができる。例えばドイツ語では、*vergeblich* など、結果を表す副詞表現が広く用いられるが、これを日本語で「むなしく」などの語を用いて直訳しようとする、座りの悪い表現になってしまうことが多い。次は日本語原文とドイツ語訳からの例であるが、両者は基本的に異なった表現になっている。

- (35) a. 長い手紙も何度か書いた。でも返事は返ってこなかった。(村上春樹「国境の南、太陽の西」)
 b. Ich schrieb ihr lange Briefe und wartete vergeblich auf eine Antwort. (G. Bandini/D. Bandini 訳)

また、次のような例は日常的にはなかなか意識されにくいかもしれないが、日本語では二つの述部で表されている内容が、ドイツ語では一つの述部で処理されている例である。日本語の方では、「順次的・体験的」な把握がなされている。

- (36) a. 「明日になったらね」と島本さんは言った。「明日になったら、何もかも話してあげるわ [...]」(村上春樹「国境の南、太陽の西」)
 b. »Morgen, ja?«*,* sagte Shimamoto. »Morgen werde ich dir alles erzählen [...]« (U. Gräfe 訳)

参考文献

- Chamberlain, Basil Hall (1905/1981): *Japanese Things. Being Notes on Various Subjects Connected with Japan*. Rutland, Vermont: Tuttle.
- Goldberg, Adele E. (1995): *Constructions. A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.
- Eisenberg, Peter (2013): *Grundriss der deutschen Grammatik. Bd.1: Das Wort*. 4. Aufl. Stuttgart: Metzler.
- 本多啓 (2009): 「他者理解における「内」と「外」」坪本篤朗ほか (編)『「内」と「外」の言語学』開拓社, 353-393.
- Ickler, Irene (1990): Kasusrahmen und Perspektive. Zur Kodierung von semantischen Rollen. *Deutsche Sprache* 18, 1-

- 池上嘉彦 (1980-81): 「‘Activity’-‘Accomplishment’-‘Achievement’——動詞意味構造の類型」『英語青年』12月号-3月号.
- Ikegami, Yoshihiko (1994): The Agent and the Sentient: A Dissymmetry in Linguistic and Cultural Encoding. In: Nöth, Winfried (ed.): *Origins of Semiosis*. Berlin: Mouton de Gruyter, 325-337.
- Ikegami, Yoshihiko (2015): ‘Subjective Construal’ and ‘Objective Construal’. A Typology of How the Speaker of Language Behaves Differently in Linguistically Encoding a Situation. *Journal of Cognitive Linguistics* 1, 1-21.
- 影山太郎 (1994): 「語彙概念構造と結果表現」『英語青年』7月号, 32-35 & 41.
- 影山太郎 (1996): 『動詞意味論』くろしお出版.
- Kaufmann, Ingrid (1995): *Konzeptuelle Grundlagen semantischer Dekompositionsstrukturen. Die Kombinatorik lokaler Verben und prädikativer Komplemente*. Tübingen: Niemeyer.
- Kaufmann, Ingrid/Wunderlich, Dieter (1998): Cross-linguistic Patterns of Resultatives. *Arbeiten des Sonderforschungsbereichs 282, Theorie des Lexikons Nr. 109*. Düsseldorf.
- 草山学／一戸克夫 (2005): 「日本語と英語の結果構文再考——Cause-Effect か行為の目的か」『日本認知言語学会論文集』5, 175-185.
- 久野暉 (1978): 『談話の文法』大修館書店.
- Leirbukt, Oddleif (1997): *Untersuchungen zum bekommen-Passiv im heutigen Deutsch*. Tübingen: Niemeyer.
- 三瓶裕文 (2012): 「体験話法の機能について——二重の視点性の観点から」『エネルギー』37, 17-32.
- Müller, Arnold Heinrich (2010): *Geheimnisse der Filmgestaltung*. Berlin: Schiele & Schön.
- 中村芳久 (2004): 「主観性の言語学」中村芳久 (編) 『認知文法論 II』大修館書店, 3-51.
- Ogawa, Akio (2003): *Dativ und Valenzerweiterung. Syntax, Semantik und Typologie*. Tübingen: Stauffenburg.
- 大藪正彦 (2000): 「行為と変化——ドイツ語における他動性の拡張について」『島大言語文化』10, 67-88.
- 大藪正彦 (2002): 「コーパスによる bekommen 受動分析」井口靖 (編) 『コーパスによる構文分析の可能性』(日本独文学会研究叢書 9), 47-59.
- Ozono, Masahiko (2003): Sensationsschema und Aktionsschema – aus kontrastiver Sicht. *Neue Beiträge zur Germanistik* 2 (1), 68-79.
- Ozono, Masahiko (2005): Das bekommen-Passiv aus japanischer Sicht. Semantische Funktion und Motivation zur Anwendung. In: Narita, Takashi u.a. (Hg.): *Deutsch aus ferner Nähe*. Tübingen: Stauffenburg, 57-77.
- Ozono, Masahiko (2008): Subjektive und objektive Auffassung. Zwei Raumauffassungsweisen in kontrastiver Sicht. *Neue Beiträge zur Germanistik* 7 (1), 75-90.
- 大藪正彦 (2008): 「もう一つの受動態?——bekommen 受動」三瓶裕文／成田節 (編) 『ドイツ語を考える——ことばについての小論集』三修社, 129-137.
- 大藪正彦 (2012): 「翻訳と聞き手・読み手の視点——共同注意を軸とした日独語対照研究」竹内義晴 (編) 『翻訳という問題から見えてくる言語, 文化, 人間』(日本独文学会研究叢書 85), 40-56.
- Ozono, Masahiko (2013): Intersubjektivität im deutsch-japanischen Kontrast. Perspektivische Interaktion zwischen Sprecher und Hörer. In: JGG (Hg.): *Beiträge zur deutschen Sprachwissenschaft*. München: Iudicium, 88-102.
- Rapp, Irene (1997): *Partizipien und semantische Struktur. Zu passivischen Konstruktionen mit dem 3. Status*. Tübingen: Stauffenburg.
- 柴谷方良 (2000): 「ヴォイス」仁田義雄ほか『文の骨格』岩波書店, 117-186.
- 高見健一／久野暉 (2002): 『日英語の自動詞構文』研究社.

- 轟里香 (2004): 「英語および日本語における結果構文——Iconicity の観点から」『北陸大学紀要』28, 247-255.
- Washio, Ryuichi (1997): Resultatives, Compositionality and Language Variation. *Journal of East Asian Linguistics* 6, 1-49.
- 鷲尾龍一 (1997): 「他動性とヴォイスの体系」鷲尾龍一／三原健一『ヴォイスとアスペクト』研究社出版, 1-106.
- Wegener, Heide (1985): *Der Dativ im heutigen Deutsch*. Tübingen: Narr.
- Welke, Klaus (2009): Valenztheorie und Konstruktionsgrammatik. *ZGL* 37, 81-124.
- Zaima, Susumu (1987): ‘Verbbedeutung’ und syntaktische Struktur. *Deutsche Sprache* 15, 35-45.

(Abstract)

Anwendbarkeit der Konstruktion Ein deutsch-japanischer Vergleich

Masahiko Ozono

In diesem Beitrag werden die sog. Resultativkonstruktion und das *bekommen*-Passiv im Deutschen mit äquivalenten Konstruktionen im Japanischen verglichen, und es wird gezeigt, wie unterschiedlich je nach Sprache die Anwendbarkeit der Konstruktion sein kann, daß sie aber zugleich im jeweiligen Sprachsystem ihre Gründe hat.

Im Deutschen verfügt die Resultativkonstruktion über einen größeren Anwendungsbereich:

- (1) a. Sie hat den Boden kaputt getanzt.
 b. *Kanojo wa yuka o boroboro ni odotta. (japanisch)
 sie TOP Boden AKK kaputt zu tanzte

Das *bekommen*-Passiv zeigt hingegen eine relativ beschränkte Anwendbarkeit:

- (2) a. *Er hat den Apfel gegessen bekommen/gekriegt.
 b. Kare wa ringo o tabete moratta. (Japanisch: *-te-morau*-Konstruktion)
 er TOP Apfel AKK essen bekam (Hilfsverb)
 „Ihm zugunsten hat jemand den Apfel gegessen.“
 c. Kare wa ringo o taberareta. (Japanisch: indirektes Passiv)
 er TOP Apfel AKK essen-PASSIV-PRÄTERITUM
 „Ihm zuungunsten hat jemand den Apfel gegessen.“

Die oben genannten Konstruktionen, die auf den ersten Blick wenig miteinander zu tun haben, nehmen im Prinzip eine Person als Subjekt, wodurch ein interessanter Prozeß sichtbar wird: Nämlich wie sich diese Person zu einem selbständigen Ereignis in Beziehung setzt. Hierbei zeigen sich zwei kontrastive

Schemata: „Tätigkeitsschema“ und „Wahrnehmungsschema“ (Ikegami 1994). Beiden Schemata liegen zwei wesentliche Aspekte des Menschen zugrunde, nämlich der Mensch als Handelnder (Agens) und der Mensch als Wahrnehmender (Ikegami zufolge: „Sentient“).

Zunächst wird erörtert, wie beide Schemata in einer Sprache angewandt und erweitert werden; ferner, was die Unterschiedlichkeit überhaupt motiviert. Die unterschiedliche Anwendbarkeit der Konstruktionen (bzw. Schemata) ist letztendlich auf verschiedene Auffassungsweisen eines Sachverhalts zurückzuführen, was beim jeweiligen Sprecher gewohnheitsmäßig geschieht. Ich möchte sie mit folgenden Begriffen zusammenfassen:

Auffassungstyp der Subjekt-Objekt-Fusion (Subjektive Auffassung):

Der Sprecher befindet sich innerhalb des zu kodierenden Sachverhalts und faßt ihn als Betroffener erlebend auf. Auch wenn er in Wirklichkeit nicht dabei ist, faßt er ihn gleichfalls als Betroffener erlebend auf, als wäre er mittendrin (Selbstprojektion).

Auffassungstyp der Subjekt-Objekt-Trennung (Objektive Auffassung):

Der Sprecher befindet sich außerhalb des zu kodierenden Sachverhalts und faßt ihn als Zuschauer bzw. Betrachter distanziert auf. Auch wenn er in Wirklichkeit dabei ist, faßt er ihn gleichfalls als Zuschauer bzw. Betrachter auf, indem er sich – sein gespaltenes Selbst darin lassend – nach außen verschiebt (Selbstverschiebung).

Kurz gesagt, neigt das Deutsche zur objektiven Auffassung und das Japanische zur subjektiven. Mit dem Fokus auf die Auffassungsebene wird es nun möglich, verschiedene Phänomene – darunter auch die Konstruktion – kategorienübergreifend im Zusammenhang zu begreifen und eine einheitliche Erklärungsbasis zu schaffen. Bei einer distanzierten, objektiven Haltung können die kausalen Beziehungen zwischen Ereignissen leichter erfaßt werden, während dies bei einer „sich hineinversetzenden“, „erlebenden“ Haltung schwieriger ist. Die größere Reichweite der deutschen Resultativkonstruktion hängt mit der Neigung zur objektiven Auffassung zusammen. Bei einer subjektiven Haltung kann der Sprecher hingegen besser begreifen, was eine Person wahrnimmt, und wohl auch besser mitfühlen. Es hat also seinen guten Grund, daß die japanischen Konstruktionen wie (2b) und (2c) über eine größere Reichweite als das deutsche *bekommen*-Passiv verfügen und dazu noch zwischen positiver und negativer Betroffenheit unterscheiden.

Erschien in: *Sprachwissenschaft Kyoto* 15, 1-22, 2016.